

ピラミッドフィルム ピースリー

モニター環境を向上

キャリアブレーションツールを導入

ピラミッドフィルム ロダクシヨンススタジオに 始めた。ディスプレイや
ピースリー事業本部(東 京都市港区)は、ポストプロダクションを導入し、本格運用を 映像の広色域・ハイダイ



矢嶋氏



測定作業

ナミックレンジ(HDR)化を背景としたもの。

同スタジオは今年5月、港区芝公園に移転。従来はブラウン管の頃からの製品を使っていたが、移転に向け導入を決定した。

技術を統括する矢嶋伸行副本部長は、「ノンリニア編集室では通常、マスターおよびクライアント用、作業用モニターを使っている。旧スタジオではこれらの色合わせにストレスを感じていた」と話す。

新スタジオでは、マスターモニターを有機ELに、クライアント用を液晶に統一。機器を絞り込むことで色視聴環境は向

上しているが、多様化する視聴デバイスや作品の用途など、制作時はさまざまな状況への対応と管理が必要になる。「4K環境を整備したこともあり、複数のディスプレイを調整できる製品を入れようと考えた」(同氏)。

導入したのはスペクトラカル社製ソフトウェア「カルマンスタジオ」と、同社製プロローブ「C6」とエクスライイト社製プロローブ「i1Pro2」、

パターンジェネレーターには富士フィルム社製の「IS-min-i」を選択。そのほか「ダビンチリゾルブ」をパターンジェネレーターにすること

もできる。カルマンは、エイソーやパナソニック、ドルビーをはじめとした多くのモニターに対応し、「各ディスプレイに合わせたメニューが用意されている。マニュアルの操作画面も分かりやすい。LUTボックスを用意せず、モニターを直接調整できるのも、運用コスト面で有利」(同氏)だという。

運用時は1部屋ずつ調整する。同社は、国内用映像のほか、海外向けCMの作業も行うため、色温度を場合にに応じて変更している。

なお、編集室では必ずしもクライアント用のモニターを厳密に合わせることを要求されるわけではない。クライアントは一般家庭に多くみられる標準設定のまま確認することを望む場合が多いからだ。

矢嶋氏は、「要望に応えると同時に、色が適正に調整された形で『提供することもできる』のが重要だ」と説明。「作る側としては、合わせた状態とどう違うのか把握しておくことで、技術サービスの質を向上できる」と強調する。

今後は、調整、管理ができるスタッフを増やし、良好な環境を保っていく。